

書評

みぬま福祉会30周年記念刊行委員会 編
みぬまのチカラ
ねがいと困難を宝に

鈴木 勉



経済学は財と人との関係を分析対象とする。福祉経済学者のアマルティア・センは、分析を財の特性だけに限定することなく、人の機能にまで、すなわち、財の特性を活用して人が成就しうること——人が行いうること (doing)、なりうること (being)——まで考察を及ぼさなければならぬと述べることで (“Commodities and Capabilities”, 1985)、経世済民の学としての経済学を復権したといえよう。

また、人の福祉 (well-being) とは財の大きさや主観的満足度では測定できず、手に入れた財の特性を活用して「伸びる素質」(capability) の全面発達につなげることにあるという主張は、対人援助に関わる諸科学にも大きなインパクトを与えた。

トを与えた。

病氣や障害により直ちには財の特性を活かせない人々に対しては、福祉や教育・医療など対人援助を通して「伸びる素質」を引き出すことが求められるとするセンの見解は、「財と人」との関係を問うことで福祉の把握に画期をもたらした。

しかし、センの貢献は認めた上ではあるが、評者は「人と人」との関係もあわせ論じないと福祉は達成できないと考えている。つまり、社会の構成員がそれぞれ「能力のちがいを認め、それを受容する関係が成立しなければ、社会レベルにおいて福祉が実現したとはいえないからである。障害の有無にかかわらず、そして老幼者を含めて社会的規模で「よ

りよき自立のためのよりよき依存関係」を形成することが、人間と社会にとって快適な状態をつくりだすことになるからであり、友愛原理にもとづく社会こそ福祉社会といふべきだからである。

身分にもとづく評価を否定した市民革命期の「近代平等原理」は、フランス人権宣言に示されるように「能力にもとづく平等論」を打ち立てたが、それは普遍的な人間の解放にはつながらず、能力に制約のある人々にはかえって解放の桎梏となった。これを超える福祉理念は第二次世界大戦後の北欧において、能力に制約のある人の「特別のケアを受ける権利」を認めて平等回復を図るノーマライゼーションとして現れ、近年ではインクルージョン「包摂」など「現代平等思想」と括ることができる新たな理念が生まれている。

以上、福祉 (well-being) を達成する条件としての「財—人」「人—人」の関係性を挙げたのは、本書を出版した「みぬま福祉会」の実践・運動を評価する際の基準になると考えたからである。この社会福祉法人は、埼玉県南部で生活介

護・施設入所支援・グループホーム・相談支援など20事業 (2014年6月現在) を展開する法人であり、本書は創立30周年記念誌として刊行された。

ところで、お気づきの読者も多いと思うが、2014年8月号から半年、本誌の表紙を飾ったのは、「みぬま福祉会」が運営する施設 (工房集) に通う障害がある仲間の作品である。この作品を「芸術作品」にしたのは、職員の見解によっている。職員集団は、障害のため言語伝達が困難な仲間をよく観察して、「社会とつながる」「お金を稼ぐ」「仲間の発達につながる」を満たせば仕事と認めようと判断し、表現活動が仕事になったのである。

「仕事に人を合わせるのではなく、人に合わせた仕事に」という「みぬま」の実践原則は、既存の制度枠組みを前提にして障害者をふるい分けるのではなく、彼らの「伸びる素質」を発見し、その全面開花を目標とする、現行福祉制度の抜本改革を迫る運動にもつながる。

本書には「困難や例外的な状況にある人を切り捨てない」という表現がある

が、「みぬま」の実践・運動は、こうした人々と「つないだ手を離さない」姿勢で一貫している。制度や仕事に人を合わせようとする「レディメイド」に對置して、評者は「みぬま」のような事業体を人に合わせた「オーダーメイド」型福祉実践体と規定するが、どんなに重い障害をもっている人であっても、じっくり観察して彼らの伸びる素質を見出し引き出すそうとしており、このような「みぬま」の30年にわたる実践と運動は、人間存在の意義を根底から問う営為と言わなければならない。

また、「人—人」の関係形成に関しても、重い障害をもつ仲間の伸びる素質を発見し、それを引き出した喜びを法人内で分かち合うだけでなく、地域社会にこの発見を伝えようとしており、「みぬま」は能力主義的な人間評価原理を打ち破り、人間観の変革を基礎にした地域変革の実践体として発展している点も、本書から読みとれる。

かつて、スウェーデンの障害者運動は “A Society for All” を掲げ、このスローガンは後に国連のアクションプランに

も採用された。また、1979年の国連総会決議「国際障害者年行動計画」では、「障害者等少数者を締め出す社会は不毛で貧しい (政府訳では、弱くてもろい) 社会である」とある。「みぬま」の運動は、障害者観の転換をベースに地域の合意を通して進めていると評価することができ、「社会の人間化」を推進する地域福祉運動と呼べるであろう。

* * *

猛烈な福祉破壊と政治反動のエスカレート。貧困と格差の拡大と言われるが、それにしても酷い時代になった。しかし、これを草の根から覆し、「もうひとつの日本」をつくる営みは、「みぬま」の実践や運動に見られるように各地で展開されている。本書を読めば、暗い時代を慨嘆するだけではなく、こうした地域実践の積み重ねとそのコラボレーションこそがファシズムを打ち破り、平和的生存権をこの国に根づかせる道であることが理解できよう。

(全国障害者問題研究会出版部・定価「本体2200円+税」)

(すずき つとむ・佛教大学教授)